

『ハートを撃ち抜け！』

著：天花寺悠

ill：蓮川 愛

「廉？」

返事がないので、カチッとコンロの火を止めた志津木は、身を乗り出して洋間を覗き込んだ。

（あ……）

ついさっきまで部屋の中を見回していたかと思ったら、待ちくたびれたのか、どうやら床に座ってベッドにもたれたまま、うたた寝してしまっただけらしい。

（疲れてるのかな）

エプロンをしたまま床にしゃがんだ志津木は、そっと男の寝顔を覗き込む。

伏せられた黒い長い睫毛。薄い瞼が時折びくびくと震えるのは、夢でも見ているのか。

精悍な顔立ちをした男は、眠っていても美形なのに変わりなかったが、その鋭い光を宿した瞳が隠されていると、幾分幼く見える。

男が頻繁にこの部屋を訪れるようになって、初めて見る無防備な姿に思わず目を奪われながら、志津木は壁際のベッドから引き剥がしたタオルケットをかけてやる。

（あ、髪にゴミ……）

そっと手を伸ばして糸くずを取る時、長い前髪に指先が触れたが、廉はぴくりともしない。ツンと跳ねて、硬そうに見えた髪は、意外に柔らかかった。

いつもおちゃらけて見えて、隙のないこの男が晒す無防備な姿は、自分を信頼してくれている証のようで、胸がざわめく。そのまま穏やかな寝顔をじっと見ていたい気もしたが、まずは夕飯を仕上げたまわらないと、と志津木は思い直して、一人キッチンへ取って返した。

トントンと、まな板で包丁を使いながら、不思議な気分になる。

料理ができるのを待ちながら、ベッドにもたれて静かにまどろむ男——。しとしと小雨の降る中、空調の効いた部屋でほかほか湯気を立てる炊飯器、夕飯の香る中、ゆったりと流れる時間。

知り合ってまだ日も浅いというのに、廉はこの部屋にしっかりと馴染み、もう長いこと、こうして二人でいるような錯覚すら覚える。

（ここに人を上げたのも、廉が初めてだっていうのに……）

うっすら頬を染めながら、志津木はできたての料理をキッチンからテーブルへと運ぶ。

よく眠っている男を起こそうかどうしようかためらっていると、夕飯の匂いに刺激されたのか、廉がうっすらと目を開けた。

「すみません、お待たせしました」

「ん……あ、すまん。寝ていたか」

目を瞬かせた廉は頭を掻き、ちらりと壁の時計に目をやる。

寝ていたのは三十分にも満たないらしい。だが、こんなにぐっすり眠れたのは久しぶりだった。

身を起こした拍子に、タオルケットが肩からずり落ちて、その存在に気づく。

「かけてくれたのか」

「夏でも油断すると、風邪引きますよ。お疲れみたいですわね」

「うーん。年かな」

「やめてください。言っときますけど、あなたと僕、一つしか違わないんですからね」

二人は他愛ないことを口にしながら、志津木の作った料理に舌鼓を打つ。

志津木の部屋はその主同様、なんだか居心地がよくて、初めにプールのお礼にと招かれて以来、廉は入り浸るようになっていた。

「そいうやさっき、キャビネットを見てみたいですけど、何か珍しいものでもありましたか」

「ああ、さすがに専門書がいっぱいあるな、と思って」

廉は食後の一本とばかりにタバコの箱に手を伸ばしながら、壁面をちらと見やる。

「医学は進歩しますからね。医者になってからも、日々勉強です」

「お医者さんは大変だな」

すかさず滑らされた灰皿を受け取り、タバコに火をつけながら、廉は目を細める。

タバコを吸わない志津木の部屋にはもともと灰皿はなかったが、いつの頃からか、テーブルの上には、廉専用の灰皿が備えられるようになっていた。

「そういう探偵はどうなんですか？ 探偵をやってくうえで、勉強も必要でしょう？」

「うーん。そうだなあ……でも、俺は学生時代から、じっと机に向かうのが苦手だったからな」

「机に向かうばかりが勉強じゃないでしょう」

こぼこぼと急須からお茶を淹れながら、志津木は目を細めて、湯気の立つ湯飲みを見つめる。

やはり、こうして誰かと向かい合って、家で食事するのはいい。

相手が廉だと、間に沈黙が落ちても不思議と気詰まりでなく、一緒にいるのが自然だった。

(男同士だからかな。だから、よけいな気を遣わずにすむのかも)

だが、同性の友達が相手だって、疲れている時は会うのも億劫だと感じていた。

対して、社交的な廉は交友関係が広そうである。プライベートなつき合いも多いに違いない。

(ああ、そうだ。あの時だって——)

考えないようにしていた美崎のことを思い出し、志津木は目を伏せる。

ずいぶんと気心が知れているように見えたのは、探偵と刑事だからだろうか。だが、六本木のバーで見かけた二人は、もっと艶っぽい関係に見えた。

「この間、病院で盗難未遂事件があって、警察の方が見えたんです」

きゅっと両手で湯飲みを握りしめた志津木は、迷いながらも、うつむいて切り出す。

「美崎さんという女性刑事でした」

「……」

「あの人、六本木のバーで廉と一緒にいた人ですよ」

思い切って口にして顔を上げると、紫煙を吐き出した廉はあっさり首を縦に振った。

「よく覚えてたな」

「あれだけの美人ですから」

いや、違う。あの時は、廉に目を奪われていたから、パートナーも覚えていたのだ。自分は人の顔や名前を覚えるのが得意でない。きっと彼女が一人で立っていても、記憶には残らなかった。

「ま、古馴染みでな。いろいろ弱みを握られまくってるんで、俺としては頭が上がらないんだ」

タバコを口から外し、いたずらっぽく肩をすくめる廉に、特に動揺したところは見られない。

(——動揺？　なんでそんなもん、廉がしなきゃいけないんだ)

自分たちは、単なる友人。それ以上でも、それ以下でもない。むしろ、美崎の出現に動揺した自分の方がおかしいのだ。

そう思うのに、目を細めて女性のことを語る廉に、今も胸がざわりと騒ぐ。

「なんだ？　妬いてくれたのか？」

「ちがっ……」

思わず顔を上げたところを、身を乗り出した廉にチュッとキスされる。

口の中にわずかに残るタバコの味——。

「あ……」

唇を押さえた志津木はみるみる赤面する。それまでぬるま湯のように居心地よかった十畳一間は、途端に気温が上昇し、息苦しいものへと変わったようだった。

「隙あり」

「も、もう！」

くしゃりと髪を掻き混ぜながら、涼しい顔で笑う男前が憎らしい。

拳を振り上げた志津木に、廉は元の席に戻りながら、タバコの火を灰皿に押しつける。

「美崎とのことを気にしてるんだったら、あいつとはなんでもねえよ。単なるくされ縁だ」

「そ、そんなこと、誰も聞いてません！」

空いた皿を片づけるふりをして、志津木は焦ったように立ち上がる。

「気になってたんじゃないのか？」

「違いますっ……！」

間髪容れず返しながら、志津木は開いた冷蔵庫の扉に赤い顔を隠す。

だが、沈みかけていた気持ちがかきめんに浮上したのは確かだった。

「そりゃ残念。そろそろ俺を意識してくれる頃かと思ってたんだが」

「……っ、デザート、ゼリーと果物とどっちがいいですか？」

舌を噛みそうになったのを危うく回避し、ふざけた声をなんとか無視して返せば、部屋の方からさらにのんびり聞こえる爆弾発言。

「んー、俺的には、志津木がいいかな」

耳までが燃えそうに熱い。まったく、この男は言うにこと欠いて、なんてことを言うのだ。

「そういうこと言う人には、デザートあげませんっ」

本文 p87～93 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>